

いつもと変わらない生活を送る一人の少女ー白嶺レイム

業中に寝入ってしまった。  
私なんて寝てしまったのかな。

世界はいつもと変わらないはずだった……

妙な夢を見始めるようになった。気のせいだと思ってた。それ

がこれから身を投じるかもしれない事の前兆とは知らず。

ある日、異変とは急にやっけてくるものだ。

歩いている時に地震が起き、建物が崩れ始めたのである。

周りの風景が止まった。

目の前には見知らぬ、いや夢に出てきた変な服の女の子が立っていた。彼女から簡単な説明、世界は9つの世界に別れて、崩壊しようとしているから彼女の代わりに旅に出ろとのことだった。

そして

彼女の旅は始まったのだ。〜東方異邦人

### 【東方大戦】

気づけば荒野に立っていた。アキユウは辺りを見渡してみるのが、何も無い。

そこへいきなり爆発が起こる。身体をしゃがませるアキユウ。人が、妖怪が、神が数多な者たちがこちらへ向かってくる。走る者、飛んでいる者などいる。そこへ薄紅色の光弾が襲いかかる。走っている者たちは爆発で倒れ、飛んでいる者たちは光弾に撃ち落とされる。今まで立っていた彼らは今はもつ地に伏せている。

アキユウは地に降り立つ人を見る。

見覚えがある。

「……レイム」

### 【OPパート】

「授業が終了しましたわよ。日枝さん」

そこは某キリシタンの女学校である。日枝アキユウ。彼女はこの学校の主席だったのだからであつた。何と今日は珍しく授

起こしたのは親友の白嶺レイムであつた。彼女とはなんで友達になったのかはまったく覚えてない。たぶん気の迷いだと自分には信じたい。とうとうかそうでありたい。

「今日もいつものところへっ」

「ええ。そうねそうでしたしよっ」

「光琳堂」と呼ばれる森近リンノスケが骨董品を集める骨董品屋でもあるが、売れない喫茶店もやっている。彼女たちはいつも学校が終わるとそこへ行くのが日課になっている。そこへ行く途中、レイムの頭の何かがぶつかったのだ。

「痛っっい。なんなのよ急に〜」

なんとも形容し難いオーパーツとも言い難い石の塊のような物がぶつかったのである。見た目ヘルムのような思えるが気のせいだろう。そんな塊がぶつかった割にはレイムには外傷はなさそうである。なんて頑丈なんでしょう。不機嫌になるレイム。ここ最近不機嫌であつたが、更に不機嫌になった。ブツブツ文句をレイムが垂らしているうちに光琳堂に到着する。

到着するなりレイムは

「私、緑茶で。あとお菓子は水無月で」

「じゃ私は紅茶で。あと茶葉はダーシリン。お菓子はドーナツでよろしくお願いしますわ」

と無理をリンノスケ。いつものことなので文句は言つのは無駄だと知っている。

「どうぞ、お待たせいたしました。お嬢様方」

「下がっていいわよ」

レイムはリンノスケにさっき拾った物を見せる。

「アಂತ、これが何かわかる？骨董品集めてるからわかるんじゃないの」

「これはまた珍しいものを拾ってきたね」

「知っているの」

「ちよっと喜びレイム」

「ええ、知ってますよ」

「死ぬ」

レイムは再び不機嫌になつて出てきたお茶を飲む。

「まあ、持つていっても損にはならないから持つてきなさい」  
不機嫌さが増すこと



